



知創館の現状と課題

—メディアセンター型図書館15年間の歩み—

同志社中学校・高等学校／高等学校 司書教諭

足立 朋子

<抄録>

2004年の開館当初はまだ珍しかったメディアセンター型の学校図書館も、現在はその存在がすっかり当たり前ものとなっている。本校でも運用開始以降、多種多様なツールの特性を理解し、活用する力をつけるためにさまざまな教科と連携しながら取り組みを進めている。ここでは新聞の利用に焦点を当て、現在までの取り組みと今後の課題について報告する。

<キーワード>

学校図書館、情報検索、オンラインデータベース、利用指導

1 同志社高等学校とメディアセンター知創館

同志社中学校・高等学校は京都市にある全日制普通科の高一貫校である。校祖新島襄の志をもとに、キリスト教主義・自由主義・国際主義に基づく「良心教育」を推し進めている。高等学校1080名・中学校880名という学校規模と、特色ある授業、各種の行事、課外活動に対応するため、教室棟や体育館などと同様に図書館も中・高それぞれ別々に運営している。

今回は高等学校のメディアセンター知創館での活動を報告する。

メディアセンター知創館（以下「メディアセンター」）は2004年4月に開館した。開架6万冊、閉架1万冊の蔵書を擁し、AV資料、39タイトルの雑誌、新聞8紙ほか、新聞記事検索データベース2種、オンラインデータベース1種（ジャパンナレッジ）が利用可能である。メインホールには、授業教室用に2つの閲覧スペース（48名定員）、およびメディア編集コーナー、ブラウジングコーナーを備えている。デスクトップPCは20台（うち4台は映像編集などでもできる高スペックなもの）、館内貸出し用ノートPCは74台、新聞記事データベース（CD-ROM）専用端末1台、複合機1台を常設し、生徒の授業や課題、課外活動の利用に供している。一方、中高全

学年の生徒にiPadを購入させており、学内どこからでもOPACによる資料検索、データベース検索、Web検索が利用できる。座学中心の科目においても新聞記事の検索や図書館資料検索の案内など、リサーチの導入部分は教室で行い、空き時間を使って現物資料の利用やプリントアウトができるよう学びの環境を形成している。



2 「朝日けんさくくん」の学校での利用

本校では、朝日新聞社の新聞記事データベース「朝日けんさくくん」を、2005年から利用している。現在、50アクセスの同時利用が可能であり、授業や課題作成で多くの生徒が活用している。尚、前述した通り、メディアセンター内のPC以外からもアクセスが可能となっている。

以下に紹介する事例では、開館以来ほぼ毎年、新聞記事検索を利用している。

一つ目は、1年必修科目「社会と情報」である。入学当初のオリエンテーションでは時間的制約があり、図書館利用のガイダンスを十分に行うことができないため、一部をこの授業内で行っている。具体的にはメディアセンターのサービスを紹介し、実際に図書館所蔵資料を検索する実習、ポータルサイトから契約データベースにアクセスし、利用する実習などを行っている。

二つ目は、3年の総合的学習の時間「現代社会研究」であ

ADATHI, Tomoko : 同志社中学校・高等学校／高等学校 司書教諭（京都府京都市左京区岩倉大鷲町 89）

る。この授業は1講座上限35名、毎年7～8講座が開講されている。2020年度は、7講座を4名の教員が担当している。通年のテーマは担当者により異なるが、公民分野で生徒個人の問題意識に基づき、探究を深める学びを行っている。授業形態としてはディベート、プレゼンテーションなどを積極的に取り入れ、評価対象としてレポートや小論文を課す形式が多い。どの授業においても、調査・分析に必要な資料、および意見を述べる際の参考文献の収集に、図書館の利用、とりわけ新聞の利用は不可欠である。

例えばある担当者の授業では、提示したテーマでディベートを行うために、論拠となる資料・データを探すツールとして新聞記事検索を頻繁に利用している。「SDGs」を取り上げた昨年は、まずテーマに対するレクチャー、ガイダンスをある程度行った後、生徒にリサーチさせる段階に進む。キーワードで検索し、周辺情報を探らせる際、新聞検索はとても有効である。この授業の担当者は、1つの事象について、「何日間かの経過を追うこと」「(特にディベートの場合は)他紙の記事と比較すること」を心がけるよう指導している。

別の担当者の授業では、まず新聞を読み、時事問題の中から、自分が関心を持つテーマを選び、レポートを作成する課題に取り組ませている。この授業の中でも、テーマへの理解を深め、論拠となる資料を集めるために新聞記事検索を有効なツールとして利用している。



最後に学内推薦入試課題での利用を紹介する。本校では約85%の生徒が学内推薦で同志社大学・同志社女子大学へ進学する。推薦入試を控えた12月、メディアセンターは課題作成の拠点となる。また、希望する学部志望動機文をまとめる推薦入試課題でも、知識を確認し、問題意識を研ぎ澄ます手段として新聞記事を活用させている。記事検索に対する需要が最も高まるのはこの時期である。特に社会科学系学部の推

薦入学試験では、関心のある時事問題について理解の「広さと深さ」を問われることが多いため、日頃から新聞を読むよう各教科は指導に力を入れている。

3 新聞記事データベースの活用状況

2で述べたように、入学時に新聞記事データベースが図書館の「当たり前の」サービスであることを周知し、カウンターでのレファレンスも有効な情報源として教育を行っている。

また、3年必修科目「政治経済」では長年、新聞の切り抜きを通年の課題として行わせている。①新聞を読み、②関心のある記事を切り抜き、③重要だと思う箇所にラインを引き、④記事の内容を要約し、⑤200字程度で自分の意見、感想を書く課題である。

本校では、「新聞を学習で使う」「新聞を情報源として利用する」「新聞を読む」ことが、大学へ進学する高校生にとって、常に身近にある学びの手段となっている。

4 今後の課題

今後の課題の中で重要なものは、求める情報にたどりつくために検索の精度を上げることである。効果的な絞り込み、範囲指定などができず、とりあえずキーワードを入力し、その時々検索結果で満足するレベルにとどまっている生徒も数多く存在する。また、基本的な検索の方法を知らないために求める情報に到達できない生徒も少なくない。このような問題は新聞記事検索に限ったことではなく、OPACの使い方、Webでの検索においても同様に見受けられる。限られた時間の中で、求める情報を的確に獲得する力を養うために、一層の工夫や働きかけが必要である。

これとは別に、新聞本紙(紙媒体)とデータベースの違いを認識することも大切にしたい観点である。新聞記事データベースはキーワードで検索でき、求める情報に素早くアクセスできるという大きなメリットがある。一方、紙媒体には、関心のなかった記事、知らなかった事象にふれることができるという点で、データベースにはない魅力がある。

目的に合ったメディアを選択する力を養うことも今後の教育の重要課題である。